

平成21年 5 月 25 日現在

研究種目： 若手研究(B)  
 研究期間： 2007～2008  
 課題番号： 19720159  
 研究課題名(和文) 出羽三山修験道の在地浸透とその特質に関する研究  
 研究課題名(英文) A Research on the Spread and the Characteristics of Dewa-sanzan Shugendo to the Regional Society  
 研究代表者  
 山澤 学 (YAMASAWA MANABU)  
 筑波大学・大学院人文社会科学研究科・講師  
 研究者番号： 60361292

## 研究成果の概要：

江戸時代における出羽三山修験道とその信仰の歴史的展開、およびその特質を、信仰圏の縁辺部にありながら、三山のうち湯殿山信仰が特徴的に展開した信濃・越後両国(長野県・新潟県)の事例を中心に同時代史料を収集、制度的諸側面をもふまえ解明した。とくに修験が17世紀前半、死霊観に関与して在地に定着したこと、その存在形態は在地の協同体(共同体)に規制されていたこと、18世紀以降は日本近代へ向かう個人に救済を説き、既成宗教の枠を超えた革新的な覚醒運動を進めたことを実証的に解明した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
総計	1,700,000	210,000	1,910,000

研究分野： 人文学  
 科研費の分科・細目： 史学・日本史  
 キーワード： 江戸時代、修験道、出羽三山、湯殿山行人、在地修験の本末編成、  
 鐵門海、個人の救済、心縁

## 1. 研究開始当初の背景

日本における修験道とその信仰は、日本社会の基層を成す文化現象の一つとして、日本史学のみならず、日本民俗学・宗教学・文化人類学・歴史地理学研究上においても注目されてきた。

霊山出羽三山(羽黒山・湯殿山・月山、山形県)の修験道とその東日本に広がる信仰にかんする研究もその一つで、第二次世界大戦以降研究が本格化した。

教団形成および檀那場など基礎的考察を行い、『新版出羽三山修験道の研究』(佼成出版社、1986)に結実した戸川安章の研究をはじめ、檀那場の特質を明らかにした堀一郎「羽黒を中心とする『霞』の組織」(『我が国民間信仰史の研究』2 宗教史編、東京創元新社、1953)、羽黒山を本山とする羽黒派と呼ばれる末派修験の東北地方における展開を究明した森毅『修験道霞職の史的研究』(名著出版、1989)、湯殿山に固有の即身仏信仰を解明した堀一郎「湯殿山系の即身仏(ミイ

ラ)とその背景)、『宗教・習俗の生活規制』、未来社、1963)、内藤正敏『日本のミイラ信仰』(法蔵館、1999)、信仰圏を地理的分布・参詣記録解析を通じ解明した岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』(名著出版、1992)、同『出羽三山の文化と民俗』(岩田書院、1996)、同『出羽三山信仰の圏構造』(岩田書院、2003)、羽黒山秋峰の個別研究で、記録映像『修験羽黒山秋峰』(ヴィジュアルフォークロア、2005)をともなう島津弘海・北村皆雄編『千年の修験 羽黒山伏の世界』(新宿書房、2005)など多くの先行研究がある。出羽三山修験道は、1980年代末以降、とくに近年には修験道研究のうえで重要な研究対象であるといえる。

江戸時代の修験道は、下野国(現 栃木県)日光山および紀伊国(現 和歌山県)熊野三山の修験道を検討した拙稿「日光修験冬峰における御松焼・扇之的の執行形態」(『山岳修験』28号、2001)および「修験勢力のひろがり」(鹿沼市史編さん委員会編『鹿沼市史』通史編原始・古代・中世、鹿沼市、2004)において指摘したように、修験道の全盛期である中世の後史、あるいは停滞期とされてきた。出羽三山修験道とその信仰の研究においても、それらは例外でない。先行研究においては出羽三山の本山としての機能、そして東北地方の信仰形態から解かれてきた。しかし、東北地方における信仰は、出羽三山膝下にあるためにその影響の強さから劇的な変化は見受けられず、一面的な現象のみに固執することにより、停滞としか目に映らなかったのである。

しかし、拙稿「17世紀越後国内における湯殿山行者の活動—岩船郡牛屋村法徳寺を中心に—」(『日本史学集録』22、1999。以下、旧稿と称する)で指摘したように、17世紀の出羽三山信仰圏の縁辺部に位置する越後国(現 新潟県)内の出羽三山修験道・信仰をみると、そこには民間社会の変動に対応し、また、他の修験道・宗教との競合による劇的な転換が見受けられる。そして、その信仰は村内鎮守の祭礼その他の村方・同族団の民間信仰・年中行事など生活文化のうえにも大きな影響を現に残しており、地域に固有の文化の基層を形づくっているという見通しを得るに至り、先行研究が等閑視してきた江戸時代修験道の有する文化的特質を再検討する基軸を示し得るものと判断した。

## 2. 研究の目的

本研究は、出羽三山の修験道とその信仰が江戸時代、在地に浸透・定着していく歴史的展開を関東・信越地方における具体相から考察し、その文化的特質を明らかにすることを目的とする。

従来の修験道研究においては、霊山そのものの史料、あるいはその膝下にある地域の史料を基に研究されてきた。そのために、霊山そのものの影響が強すぎるために、歴史的変遷や他の信仰との差異を明らかにすることは、きわめて困難な作業である。

出羽三山修験道とその信仰の特質は、本山の教学・本末編成などに見受けられることは否定しないが、その内実を明らかにしていくことが重要である。そのためには、単に本山である出羽三山とその膝下の東北地方を取り上げるのではなく、その信仰圏縁辺部にあたる地域を取り上げ、その浸透が図られた普及の特徴と、これを受け入れた在地側の状況の解明が有効である。これにより、興隆・衰退期の個別具体相を明示し、かつ、他の信仰と競合する相貌まで明らかにすることが容易になる。

すなわち本研究は、岩鼻前掲著書によれば出羽三山信仰圏の縁辺部にあたり他の信仰との衝突がある関東の都県、長野県(もと信濃国)、新潟県をフィールドとし、史料を博搜、検討することとする。かつ、在地における地域社会の展開、すなわち、①当該地域において村落の形成期とされる17世紀前半から中葉、②いわゆる農村荒廃期にさしかかる18世紀中葉、③近代社会へと胎動する時期である19世紀前半、以上の3時期の動向に注目し、解明していく。

## 3. 研究の方法

2. に述べた目的を達成するために、本研究では、具体的には以下の研究方法を採った。

### (1) 研究対象地域および史料

とくに史料が豊富な信濃国(とくに佐久郡、現 長野県佐久市)・越後国(とくに岩船郡、現 新潟県村上市)の事例を中心に、関東の事例・状況をも睨みながら検討することにした。

史料については、出羽三山の立地する山形県鶴岡・酒田地域に残存する本山側の史料(海向寺文書・戸川安章氏収集文書・酒田市光丘文庫所蔵文書など)、および出羽三山信仰圏の縁辺部にあたる越後国岩船郡・信濃国佐久郡に残存する在地側の史料(岩船町年寄伴田家、下越村名主佐々木家などの個人所蔵文書)の収集・整理を実施するとともに、当該地域に残る石造物・民俗行事の調査を実施した。また、これらの史料の検討を相対化するための事例を集積するために、栃木県大田原市・さくら市などの関連文献史料・石造物・民間行事に関しても調査を進めた。

なお、修験道は、明治初年に廃止された。にもかかわらず、現代まで色濃く残存してきた。しかしながら、高度経済成長・バブル経

済期を経た近年、民俗行事は改廃される傾向が強く、また、石造物も経年劣化が見受けられる。現在において、日本社会の基層文化にかかわる史料としてこれらの修験道関係史料を博搜、収集、記録することは、社会的意義があると考えられる。

史料の複製・収集にはデジタルカメラを利用し、大量かつ早期の作業を目指した。それらの整理作業については、研究協力者1名の協力により円滑に行うことができた。

## (2) 分析方法

従来、出羽三山修験道を分析する際には、同じ地域で展開するその他の修験道については等閑視される傾向にあった。歴史的視野に立脚する本研究では、民俗学・宗教学的アプローチにおいて従来看過されてきた寺院・修験の本末編成の進展や檀家制度など、江戸時代日本固有の歴史的・社会的展開を総合的に検討することが可能になる。

このことを念頭におき、前述のように、以下の3時期について、特徴的な展開を認められる信濃国佐久郡・越後国岩船郡の事例を集中的に分析した。

### ① 関東信越地方における村落の形成期とされる17世紀前半から中葉

旧稿で解明した関東および越後国の事例をふまえ、信濃国佐久郡の事例を中心に再検討した。

### ② いわゆる農村荒廃期にさしかかる18世紀中葉

旧稿でも見通したように、当該期は、越後の出羽三山修験の信仰は衰退期にある。信仰主体の変化を、①の成果をふまえつつ、関東信越地方の村方に固有な生活の変質にかかわらせ、検討する。中心事例は史料が豊富な信濃国佐久郡の事例である。

### ③ 近代社会へと胎動する時期である19世紀前半

②で明らかになる断絶期を経て、近代社会へと胎動する時期に再び活性化する出羽三山修験道の布教とその定着過程を検討する。当該期の越後国岩船郡では在地に多くの石造物が出現し、また民俗行事にも連動するようになる。また、湯殿山行者のうち最後の即身仏となった仏海が輩出される。即身仏信仰を定着させた鐵門海を中心事例に、布教の担い手で木食行者を自称した湯殿山行人の越後布教とその背景・特質について考察する。

## 4. 研究成果

本研究における具体的な研究成果は、次の(1)～(4)の4点である。これらは、5. に示すように、図書1件、学術論文2件、学会発表1件により公表した。なお、収集資料は次

期研究課題においても活用し、さらなる成果の公刊を目指す予定である。

### (1) 出羽三山信仰圏の縁辺部にありながら、三山のうち湯殿山信仰が特徴的に展開した信濃・越後両国の事例に関し、多くの史料の複製・収集を行うことができた。

とくに酒田市立光丘文庫所蔵の湯殿山別当・鶴岡藩士関係文書、村上市の岩船町年寄伴田家文書、佐久市の下越村名主佐々木家文書等から、先学が等閑視した同時代史料を得ることができ、また、越後国岩船郡・信濃国佐久郡における出羽三山供養塔の分布を明らかにできた。

これらを用いることにより、本末関係・檀家制度など制度的側面をふまえつつ、信仰圏縁辺部の在地社会に定着した出羽三山修験の存立形態、および日本近代への道程における布教形態の考察を進める基礎的条件が整ったことになる。

### (2) 信濃国佐久郡を事例に検討した結果、17世紀前半、湯殿山行人が、在地の死霊観に立脚し、形成期の村協同体と結節して定着したこと、しかしながら、畿内本山による本末編成の進展にともない消長したことが明らかになった。越後国内を分析した旧稿では史料が少なく明らかにできなかった、同時期に出羽三山修験が消長する要因も、これと軌を一にするものと予想される。他方、18世紀中葉以降、出羽三山への信仰登山が盛行し、従来教学論争と見なされてきた羽黒山・湯殿山別当の相論もまた、このような在地における社会の変質を背景とすることを指摘できた。

### (3) 越後国岩船郡を事例に、18世紀中葉以降、信仰登山の盛行の結果表出した羽黒山・湯殿山別当間の相論後における教学の再構成が既成宗教に対する内省を背景として行われたこと、また、その内省の結果、19世紀初頭、湯殿山木食行者鐵門海が在地社会の変質をとらえ、即身仏信仰を確立し、かつ即物的・直接的で平易に、とくに在地の新興勢力に対して個人の救済を説く革新的な覚醒運動を体現したことを実証的に解明した。

### (4) (2)・(3)の成果を相対化するために収集した下野国内の事例、とくに従来知られていなかった塩谷郡内での羽黒修験・湯殿山行人の活動に関する史料の一部を翻刻、紹介した。在地に根づいた羽黒修験の活動の傾向は上述の信濃国・越後国の動向と共通する部分が多いことが確認できた。しかしその一方で、両者の間には差異も認められる。これらの詳細な分析は、近接する那

須郡・河内郡・都賀郡ないし常陸国(現 茨城県)などの事例の収集・分析とともに今後の課題である。

上述した個別的な課題も残るものの、当初の目的は達成できた。とはいえ、本研究を通じ、出羽三山修験道史において、日本近代の担い手である個人およびその心縁による社会結合形態を再検討することが課題化した。また、研究期間終了間際に確認された想定外の未紹介新出史料は十分に活用できず、そのために当初予定していた史料集の完成・公開も見送らざるをえなかった。これらをふまえ、本研究を拡張し継続するために、次年度から、新規課題「近世後期地域社会における出羽三山修験の活動と心縁結合の特質に関する研究」を構築し、残された課題の解決を進めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

- ① 山澤 学、「18世紀信濃国における出羽三山修験の存在形態 —佐久郡内の湯殿山行人を中心に—」、『信濃』、61巻3号、23-40、2009、査読有
- ② 山澤 学、「19世紀初頭出羽三山修験の覚醒運動 —湯殿山・木食行者鐵門海の越後布教を中心に—」、『社会文化史学』、52号、75-94、2009、査読有

[学会発表] (計1件)

山澤 学、「18世紀信越地方における出羽三山修験の動向 —信濃国佐久郡内の湯殿山行人を中心に—」、日本山岳修験学会第29回妙高学術大会、新潟県妙高市・妙高メッセ、2008年11月2日

[図書] (計1件)

川田純之・平野哲也・舩木明夫・山澤学・仲沢 隼、『氏家町史』史料編近世、さくら市(栃木県)、1-947、2009

分担単著

「解説 第9章 寺社と信仰・第10章 氏家地域の文化・第11章 郷土への眼差し」、35-40

「第4章 村の自治と暮らし 第3節 人の一生」、332-350

「第8章 村のできごと 第1節 災害と飢饉」、627-654

「第9章 寺社と信仰」697-766

「第10章 氏家地域の文化」、767-817

「第11章 郷土への眼差し 氏家記録伝、鍛冶ヶ沢原因帳」、885-905・936-939

分担共著(単著部分の明示不能)

「第11章 郷土への眼差し 氏家村覚書」、820-885

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山澤 学 (YAMASAWA MANABU)  
筑波大学・大学院人文社会科学研究所・講師  
研究者番号：60361292

### (2) 研究協力者

清水克志 (SHIMIZU KATSUSHI)  
文教大学・教育学部・非常勤講師